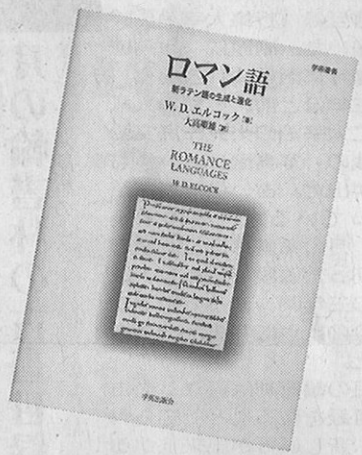
ロマン語の形成における内的発展を通時的に記述する

ラテン口語とラテン文語の相違は文体的なものに過ぎないという考え方

中山恒夫

W. D. エルコック 著
大高順雄 訳
▶ロマン語
新ラテン語の生成と進化
12・25刊　A5判638頁　本体9400円
発行：学術出版会／発売：日本図書センター



ロンドン大学名誉教授ウィリアム・デニス・エルコック William Denis Elcock（1910-60）は一生をこの『ロマン語』（*Romance Languages*）の執筆に捧げ、ラテン語が新ラテン語すなわちロマン語に変化した全過程を解明して、初版刊行後まもなく他界した。訳者の大高氏は古フランス語の文献研究を中心にして、広くロマン語全体を見渡し、さらにアングロ・ノルマン語にまで視野を広げて、西ローマ帝国の滅亡から今日に至るまでのその版図の言語状況に精通した、数少ない日本人ロマン語学者の一人であり、氏の業績はわが国以上にフランスで高く評価されている。

ロマン語の総体はイタロロマン語（イタリア語、サルディニア語、コルシカ語）、ガロロマン語（フランス語、プロヴァンス語など）、イスパノロマン語（カタロニア語、カスティリア語、ポルトガル語、バルカンロマン語（ルーマニア語）、レトロマン語（フリウル語、ラディン語、エンガディン語）に分類される。著者は、『ロマン語』に先立つ業績としてカスティリアのアラゴン方言に関する三篇の論文を発表したように、ローマ以前とローマ時代の地名に注目する固有名詞学者でもあり、ピレネ地方の方言調査を行う言語地理学者でもあった。

本書ではエルコックは、ローマ帝国とそれを継いだ諸国の政治と文化、三世紀に始まっていたスラヴ人のダキアへの南下、四世紀以降のゲルマン諸部族の西ヨーロッパへの侵入、八世紀からのアラビア人のイベリア半島への流入という歴史的・文化的背景の下に、ロマン語がどのように形成されて来たか、その内的発展を通時的に記述する。その際著者は、ラテンロ語とラテン文語とを異なる言語とは見ず、両者の相違は文体的なものに過ぎないと考えた上で、ロマン語の生成を基本的にラテン語のみから解明して、その音韻、語形、統語、語彙の進化の過程を歴史的・社会的・体系的に解説しているのである。

従って、ロマン語の特質をエトルスク語、オスク語、イベリア語、ケルト語などの基層語から解釈する立場を取らず、ロマン諸言語自体の内的発展から解釈する。例えば、ラテン語/f/がカスティリア語において/h/に進化し、ラテン語の長音/u/がフランス語において/y/に発展するという進化を、基層語の影響によるものではなく、各言語独自の変化であると断定する。

しかしながら、敢えて言えば、音韻進化、語形変化、豊富な語彙が詳述される一方、複合語と派生語、および統語法に関する記述が乏しいという批判は成り立つと思われる。

援用された資料は膨大である。中世ラテン語の資料としては、六世紀におけるゲルマン諸部族のサリ、リプアリア、ロタリス、ブルグンド、バヴァリアの法典、五世紀から十五世紀までの『ゲルマニア史料』が、教会ラテン語の資料としては、三世紀から十三世紀までのラテン語教父たちの著作集、八世紀の『ライヒェナウの註解』、『カッセルの註解』、十世紀から十一世紀にかけての『サン・ミリィアンの註解』と『シロスの註解』が、さらに俗ラテン語の資料としては、ヨーロッパ全土の『ラテン語碑文集』、有名なポンペイの「落書き」、『プロブスの付録』、『アエテリアの聖地巡礼』が利用されている。ただ、前一世紀のラテン作家ウィトルウィウスの建築用語と、四世紀から五世紀の作家ウェゲティウスの軍事用語からの引用は少な過ぎるし、一世紀のラテン作家ペトロニウスの『サテュリコン』の中の「トリマルキオの宴会」は完全に看過されている。その一方、アラビア文字で表記されたロマン語の一種モサラビア語のハルジャの言語は引用されている。

構造言語学には懐疑的だったようである。ロマン語における二重母音化に関するシュルF. Schürrやラウスベルク H. Lausbergの見解を取り入れておらず、当時流行していた個人言語idiolect、連接juncture、形態音素morphophonemicなどの用語も使用していない。

エルコックが本書を執筆するに当ってその動機となったのは、先行する二書、フィドス著『ロマン語言語学』（B. E. Vidos, *Handboek tot de Romaanse Taalkunde*, Malmberg, 1956）とタリィアヴィーニ著『新ラテン語の起源』（C. Tagliavini, *Le origini delle lingue neolatine*, Bologna, 1964）が専門的に過ぎることであったという。彼はロマン言語学の入門書を書こうと志したのである。訳者はこの分野を専攻しようと志す読者に、上記二書に加えて、ブールシエ著『ロマン言語学提要』（Edouard Bourciez, *Éléments de linguistique romane*, Paris, 1967）を推奨している。

（ラテン語学）